リメンバー新聞

58号
2012年12月13日

編集・発行
リメンバー名古屋自死遺族の会
http://will.obi.ne.jp/remember/
remember_nagoya@yahoo.co.jp
FAX:020-4668-8925
郵便:〒458-8799
名古屋市緑郵便局留め
リメンバー名古屋

遺族向けセミナー・3月10日

２０１３年３月１０日（日）、「ウィルあいち」にて、自死遺族向けセミナーを開催することに決まりました。今回の講師は藤丸智雄氏（本願寺教学伝道研究センター）にお願いしました。 ※地域自殺対策緊急強化基金事業

2010年から行っている「遺族向けセミナー」。今回は、3月10日に地下鉄「市役所」近く、「ウィルあいち」（愛知県女性総合センター）にて行うことになりました。

講師にお招きする藤丸さんは、仏教の研究者であり、仏教教義における自死の捉え方（決して否認ではない）などについても繰り返し発言されている方です。これから打合せをさせていただき、内容を詰めていくところです。今回は、仏教を中心とした宗教と自死、遺族の生き方などに焦点を当てたお話になりそうです。少しでも皆様のお役にたてるような時間になればと思っています。

日時：2013年3月10日（日）
- セミナーは午後を予定。
- 詳細な時刻、午前の企画等は未定です。

場所：ウィルあいち（愛知県女性総合センター）
- 地下鉄名城線「市役所」下車

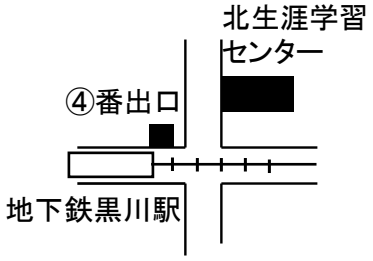
※今回は仏教を取り上げますが、リメンバー名古屋は、「特定の宗教とのみ強い関わりは持たない」との基本方針で運営しております。特定の宗教をお勧めしたりすることはありません。

秋の遠足行ってきました

※写真は、当日撮った「魚太郎」近くの浜です。

次回の遺族会

第55回
12月16日（日）13:15から
名古屋北生涯学習センター
地下鉄名城線「黒川」下車
（4番出口）よりすぐ
参加費:500円



その次は・・・
第56回 2月10日（日）
北生涯学習センターです。

日程は、ホームページまたは、電話案内でご確認いただけます。
パソコンの方
http://will.obi.ne.jp/remember/
携帯電話の方
http://www.will.obi.ne.jp/m/
電話案内（録音でのご案内）
090-8544-9408

10月14日、第16回になります「秋の遠足」で、知多半島「魚太郎」「ナチュラル村」に行ってきました。

今回は、17名の方のご参加いただき、魚太郎での浜焼きバーベキューの後、写真にある、近くの浜辺、また、ナチュラル村に行きました。10月中旬で、まだ比較的暖かく、浜辺も気持ちよく過ごせました。

いつも使うナチュラル村の喫茶店が閉店になっていたのは残念でしたが。

お互い少しでも交流を深め、日ごろから支え合える関係になればと思ってやっております。次回は、4月を予定しています。よろしければ、ご参加ください。

連載 わかちあいって何だろう？

現在は不定期での掲載ですが、「わかちあいって何だろう？」と題して、遺族の方のインタビューを中心に連載を行っています。

「わかちあい」は、リメンバー名古屋自死遺族の会において、最も大切にしているものです。簡単に言ってしまうと、集まって、話す、ただそれだけのことではありますが、普段なかなか自死について語ることができない中で、とても大切な役割を担っていると思います。

参加された方からは、もっといろんな方と話したい、堅苦しいルールがあるから話しにくいなど、さまざま意見もいただいています。また、自分がつらいのに、なぜ他人の辛い話を聞かなければならないのか、聞くことでもっと辛くなってしまう。話しても何も解決しない、話すことに意味があるのか、という根本的な疑問を投げ掛けられることもあります。

専門的、学術的なことではなく、実際にわかちあいを経験されてきた方の生の声を聞き、これから、もう一度「わかちあい」を見つめ、考えていきたいと思います。

遺族インタビュー　第6回

―亡くされたのはどなたですか？

主人です。

―参加される前はどんなお気持ちでしたか？

親、友人、姉妹の心配してくれている気持ちは解るものの、それ以上に私の悲しみ、疲労、誰に話しても理解されない満たされない思いが、いつも心の中に渦巻いていました。深く底が無い心の闇が、あの頃の私にはありました。

―はじめて参加されたのは亡くされてからどのぐらいしてからでしたか？

2か月です。

―はじめて参加された時にはどんなことを感じましたか？

大切な人を失った皆さんそれぞれに、今に至る経緯が違い、戸惑いました。

愛あふれる話しの中に、そぐわない自分がいたと感じました。

誰かにすがりたかったのですが、ここにも誰も何もすがるものは無いと感じました。恨み、憎み、鬼畜の心の私は、もう会には来ないかもと思いました。

―今までどのぐらい、期間、回数参加しましたか？

２年半の間に６、７回来ました。

―どのような思いでわかちあいに参加し、参加することで変わったことはありますか？

あれほどまでに彼に怒り、恨んでいた自分が、自らを受け入れ許し、彼も許せる日が来るのだろうかと思っていましたが、参加したことで、半歩進んだと感じました。

過去を考えても思っても、起こった事実は変えられず、今の環境、人生引き受けていくしかないことに気づきました。

―あなたにとって「わかちあい」って何でしょうか？

少しずつ心も身体も元気になっていく、心の漢方薬です。

聞くに耐えられない私の話や、その場のいろいろな状況の中で運営をされているスタッフの方々に感謝するばかりです。ありがとうございました。

自分自身を取り戻すために、大きな助けになった場所です。

―ありがとうございました。

※インタビュー（メールで行います）にお答えいただける方を募集しています。スタッフまでお知らせください。

愛知県臨床心理士会「こころの健康電話相談」のご案内

毎年行われております、愛知県臨床心理士会「こころの健康電話相談（一日電話相談）」が、来年(2013年)１月に開催されますのでご案内します。

●**日時**：２０１３年１月２７日（日）
午前９時～午後５時まで

●**電話番号**：
０５２－６８１－３５１０
●相談は無料です（通話料金はかかります）
●匿名で大丈夫です。
●相談に応じるのは、経験１０年以上の愛知県臨床心理士会所属の臨床心理士達です。

その他の電話相談

電話による相談窓口です。自死遺族に限らない、幅広い窓口です。

〇あいちこころほっとライン365
愛知県精神保健福祉センター
毎日　9:00～16:30　052-951-2881
〇名古屋市こころの健康電話相談
名古屋市精神保健福祉センターここらぼ
月-金　12:45～16:45　052-483-2215

面接相談のご案内

面接による自死遺族相談(無料)があります。
※電話による予約が必要です。

〇愛知県精神保健福祉センター
(愛知県内で名古屋市以外にお住まいの方)
要予約 052-962-5377
毎月第3木曜日　午後2時-3時30分
〇名古屋市精神保健福祉センターここらぼ
(名古屋市内にお住まいの方)
要予約 052-483-2095
毎月第3火曜日　午前10時-12時

文集「自死遺族のその後(仮)」原稿募集(予告)

来年度の事業として、文集の発行を検討しています。まだ何も決まっておりませんが、先行してお知らせ致します。
（※来年度の予算等によっては、中止する場合もあります）

■寄稿期限　・・・未定
■掲載時のお名前等　・・・　匿名、ペンネームで結構です。どのように掲載するかご指定ください。
■冊子の配布など　・・・　遺族会、公共の場所、民間会社など、幅広く不特定多数に、無償、あるいは、原価程度を基本とした有償にて配布する場合があります。
■発行時期　・・・　２０１３年度内を予定
■発行部数　・・・　未定
■その他　・・・　応募原稿は返却いたしません。

次回「ディアレスト」のご案内

家族ではないけれども大切な人を自死で亡くされた方を対象に、２ヶ月に１回、遺族会「ディアレスト（Dearest）」が開催されています。

日時: 2013年1月27日（日）13:30-16:00
場所: 名古屋市中村生涯学習センター
対象: 家族以外の大切な人を自死で亡くされた方
連絡先: the.dearest1@gmail.com
http://dearest.heya.jp

新聞郵送をご希望の方へ

1月～6月末までのお申し込み(前期)…1000円　もしくは　80円切手13枚
7月～12月末までのお申し込み(後期)…500円　もしくは　80円切手7枚
お申込みは、郵便番号・住所・氏名を記入の上ご送金いただくか、切手をご郵送ください。遺族会の当日、受付でお支払いいただいても結構です。

スタッフ募集

遺族会に参加したことがある方で、会の活動のお手伝いをいただける方募集しています。
遺族会当日に、お茶の買い出し、参加者の案内など、継続的でなくても結構です。
詳しくはお問い合わせください。

追悼

リメンバー名古屋のスタッフとして、会の初期2005年ごろから一緒に活動してくれていた「ヤン」さんが、2012年10月末、山の事故で亡くなられました。35歳でした。

今回は、彼への追悼の思いを込めたページとさせていただきます。

貴方とのはじめての出会いは、2004年、福島で開かれた自死遺族当事者と支援者のためのワークショップでした。その後、貴方はリメンバー神戸のスタッフになっていて、研究者の卵でもあった貴方から「当事者を超えて支援者を守れる論文を作りたい」と協力要請のメールをもらったのが、2005年のことでした。（※彼の言う「支援者」とは、「自分自身が当事者でもある支援者」、つまり、リメンバー名古屋における、自死遺族当事者スタッフの立場を指しています。）

リメンバー名古屋は立ちあがって2年目に入った頃、まだ毎回ドタバタしていた時期でしたが、それから貴方は、リメンバー名古屋にも、スタッフとして関わってくれるようになりました。

貴方は、研究者なのにほんとうによい論文を書いてくれました。

> 自殺や死というものは、どうしても観念的なものが先行してしまって、それらを論理的に説明することは不可能であり、不可能であるが故に論理的にその善悪を判定することもまた不可能なのだと私は思う。だからこそ、こうしたことについて、わかったようなことは口にするべきではないのかもしれない。しかし、だからこそわからない、ということをわかちあうことがとても大事なことなのだと思う。そのまなざしによって、私たち（それは援助する側も、される側も）は新しい人生の物語を生み出す可能性が出てくるのかもしれないのだ。その機能をサポートグループは担える可能性があると感じている。
>
> （やんくんの修士論文「自殺遺族をめぐるサポートグループの実践的モデル構築の必要性とその視座」2006 最終章より、無断引用）

毎月全国各地で出会っているような時期もありました。各地のシンポジウム、講演会、メンバー宅での誕生日会、入院先の病院。私の結婚パーティーでは、トーキングスティックならぬ「トーキングビール」（ビールの空瓶！）を持って、スピーチをしてくれました。貴方はなぜか私の新婚旅行にまで参加していましたね。最終日にはリメンバーの合宿になってしまっていた新婚旅行、朝起きたら貴方はもう帰ったとのことでした。なんだかんだ会えていたのは、誘えば貴方はどんなに多忙でも来てくれたからですね。

私が活動を閉じてゆくのと、貴方が活躍の幅を広げていったのとで、遠距離になってしまっていた友情、こんなことなら、誘ってもらったシンポジウムに私も全部行けばよかったとか、いろいろ後悔もしています。

あらためて今、もらったメールや、貴方の論文を読み、ああ、このときのこのメールは、どうでもいいメールにみえて本当は心配して連絡をくれていたんだなとか、それで電話をくれたんだな、とか、こういう意味だったのか、とか、その時は気づかなかったことがいろいろわかって、なのにああ、もう、そのことを伝えることもできないのか、と思ったら、まだ全然涙が出ないんだけど、運転中に少し泣けそうになりました。「″体験″を″経験″に変え、語らされる存在から、自ら物語を紡ぐ主体的な存在へ」、私たちは一緒に変化してきていたように思います。被差別の立場さえも分かり合える、どれほど大切な同志を失ってしまったのでしょう。

本当は貴方のもとにすぐに駆けつけたいタイミングで開催されたリメンバー岡崎でした。でも、私たちは、ちゃんとやらなきゃな、って、貴方に思わされたりもして、一生懸命やりました。

のこしてくれたものの一つ一つを、今、宝物のように取り出しては、眺めあかしています。貴方の言葉や思い。「死んでからも、いい仕事してくれてるよなあ」って、心からの感想です。

紹介してもらったのに読んでなかった本とか論文もたくさんあるね、ごめん。私たちは、これから、少しずつ、貴方の仕事の続きを深めていきたいと思います。これは、決意にも似て。貴方が好きだったという、グールドのバッハを聴きながら。（鷹見）

彼からの初メールは2005年9月。タイトルは「Re: 喜んで！」でした。会で出合った彼に、イベントのお手伝いをお願いしたことへの返事でした。それから7年、たったの7年だけしか関わることできなかったのです。

僕は、遺族会での運営に携わりはじめた以降の彼しか知りません。それは、彼の人生の5分の1に過ぎません。顔を合わせて話した時間を合計しても、もしかすると1週間分ぐらいしかないのかもしれません。そこで知り得た彼の姿など、ほんの一面にしかすぎないのでしょう。

先日、学生時代の彼を知る友人たち主催のお別れの会に出席させてもらいました。そこで友人たちが語った彼は、遺族会の中で見せていた「支援する者」の姿とは異なり、生の彼自身をそのままさらしていたように感じました。心の奥にある何かを、必死に絞り出して荒々しく表現しようとする姿のように僕には見えました。遺族会で関わった人たちが口にする「まじめ」「やさしい」「支えてくれた」……とは、大きく異なる姿でした。

一見、それらには大きな断絶があるように見えますが、実は、彼の中にある思いは変わらず流れ続けていたのでないかと、今は思うようになっています。それは、決して歳を重ねて丸くなったといったありきたりの話ではなく、彼の論文、活動すべてにおいて、同じ思いを持ちながらも、以前より少しスケールを大きくし、表現を若干スマートにしただけで、やりたいことは変わらなかったのではないかと思えるのです。（あー、彼に聞いてみたい。）

僕は、メールでも、会った時もよく「これどう思う？」とか、時に「あれはおかしいと思う」とか、あえて話を面倒にしながら突っかかっていくことがありました。その時少しだけ見せてくれる怒りや、いらだちの端々に、僕が知りたかった、僕が話したかった、彼の奥深く本来持っている一面を、発見したように思っていたのした。

彼が亡くならなければ、僕は彼の学生時代の姿を知ることはなかったかもしれません。なかなか自分のことを話してくれなかった彼ですから。でも、僕らには7年ではなく、もっとたっぷりと時間があると思っていました。これから先、お互い老いていくまで、少しずつ、お互いの人生を、生きざまを語りあっていきたいと願っていたのです。

彼からの最後のメールは、2012年8月「Re: 送り火」。一度来てくれたことのある、京都の五山送り火に誘ったことへの返信でした。 来年の送り火は、彼を見送る火になってしまいました。（野村）